

Title	ドイツにおける日本語学習動機に関する一考察：3人の学生を対象としたepisodic interviewingの事例をもとに
Author(s)	田村, 知佳
Citation	大阪大学言語文化学. 2009, 18, p. 157-168
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77831
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ドイツにおける日本語学習動機に関する一考察

—3人の学生を対象とした episodic interviewing の事例をもとに—* 1)

田村 知佳**

キーワード：日本語学習動機、ドイツ、エンジョイメント

In Deutschland steigt die Zahl der Japanischlernenden seit den 1990er Jahren stark. In diesem Beitrag wird daher anhand einer qualitativen Fallstudie versucht, die Motivation von Japanischlernenden in ihrer Komplexität detailliert zu analysieren.

Um die Motivation der Lernenden zu erforschen, wird auf episodische Interviews zurückgegriffen, welche den Schwerpunkt auf die subjektive Erzählung eigener Erfahrungen legen. In dieser Studie werden mit drei Japanisch- und Koreanischlernenden an einer Universität in Deutschland Interviews durchgeführt. Diese Perspektive wurde ausgewählt, weil viele Japanischlernende sich auch für Japanisch als exotische Sprache interessieren. Der Vergleich soll dazu dienen, die spezifischen Motive des Japanischlernens zu charakterisieren. Zur genaueren Analyse der Motive werden in dieser Studie nicht nur die Lernerfahrungen mit einer Sprache, sondern das Sprachenlernen insgesamt berücksichtigt. Die Interviewdaten werden nach dem Modell von Ushioda (2001) ausgewertet, das den Blick auf den Wandel der Motive im zeitlichen Ablauf wirft. In diesem Modell werden besonders die zwei Faktoren „Erfahrung mit dem Sprachenlernen“ und „Ziele in der Zukunft“ berücksichtigt.

Anhand der Studie wird deutlich, dass die drei untersuchten Lernenden den Spaß an einer exotischen Sprache betonen und weniger an konkrete Ziele in der Zukunft denken. Es ist auch festzuhalten, dass die Lernenden sich manchmal keiner Unterschiede zwischen dem Japanisch-, Koreanisch- und Chinesischlernen bewusst werden und sich nur ganz allgemein für das Lernen irgendeiner exotischen Sprache interessieren. Schließlich wird auch sichtbar, dass ihr Interesse am Lernen exotischer Sprachen teilweise aus dem Lernen anderer Sprache stammt. (z.B. Latein)

* Einige Gedanken zur Motivation von Japanischlernenden in Deutschland: Am Beispiel episodischer Interviews mit drei Studenten (TAMURA Chika)

¹⁾ この論文はお茶の水女子大学で行われた第36回日本言語文化学会で発表したものを草稿とし、さらに拡張させたものである。

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Die Ergebnisse weisen darauf hin, dass der Faktor „Spaß beim Sprachenlernen“ für die weitere Analyse der Motivation des Japanischlernens in Deutschland ein wichtiger Aspekt werden kann.

1 はじめに

ドイツにおける日本語学習者は1980年代から増え始め、1990年代からは、日本のマンガなどのポップカルチャーが流行することで、若者の日本語学習者が急増している²⁾。また、ゲーネツ(2001)の統計によると、1990年から2000年にかけて、日本語学習者は約1.6倍にもなり、その時点で約1.5万人いると推定している。なお、この数字は語学学校などに正規登録されている学習者数をもとに導き出されているため、独学などの学習者を含めると、さらに多いことが想像できる。

以前の日本語学習者は経済的関心が主流であったが、このような若者が急増することで日本語学習者の日本に対する関心や背景が多様化してきた。学習者の変化は、ドイツで行われている日本語教育の問題のひとつとなっている(松尾2005)。本研究ではドイツの社会的状況を考慮した上で学習者の観点から日本語学習動機について考察を行うことで、現地で行われる効率的な日本語教育に貢献することを目的とする。

本研究では、ドイツの社会的状況の中で日本語学習者が「どのような動機の要因から日本語学習に駆り立てられたのか」、また「その動機はこれまでどのように変動してきたのか」といった疑問を明らかにする。その上で、ドイツの日本語学習者の学習動機を解釈するために必要な分析の視点について模索する。

2 学習動機に関する先行研究と本研究における理論的枠組み

本論に入る前に、まず学習動機の理論について触れる。1990年代までの第二言語習得における動機研究は、目標言語に直接接触している第二言語の状況下で発展した、研究者があらかじめ調査項目を設定するアンケート調査が主流だった。この流れに対し、Crookes & Schmidt (1991)は学校教育の外国語教育など、目標言語に接触していない状況で、より社会的背景を考慮した研究の必要性を主張した。これをきっかけに、1990年代から様々な視点から学習動機研究が行われるようになった。Dörnyeiはその中のひとつの大きな傾向を時間的なプロセスを考慮した動機研究に当てている(Dörnyei 2006; 51)。

1990年代の流れから、第二言語習得における学習動機の研究は多様な視点から議論されてきたため、現在では研究者によってその定義も多様である(守谷2002)。

²⁾ 国際交流基金がインターネットで公開している「国別日本語教育状況」を参照。

Dörnyei は学習動機の一連の研究を概観しながら、その定義の共通項を、「なぜその行動に至ったのか (why)」、「どのくらいその行動を維持しようとするのか (how long)」と「どの程度その行動に対し力を注ぐか (how hard)」を決定するものと見出している (Dörnyei 2001; 8)。また、Schunk et al. (2008) は、教育心理学の観点から学習動機の定義を「目標が設定された行為に向かって行動し、またそれを持続しているプロセス」(Schunk et al. 2008; 4) としている。ここでプロセスとしているのは、学習動機とはひとつの結果として見られるのではなく、常に持続している要因であるからだ。その上で、目標の性質として学習者の経験や時間の経過などによって具体化されたり変動しうる点に注目している。このため、動機を調べるためには学習者の言動などから解釈しなければならない。

Schunk らの学習動機の解釈を用い、Ushioda (2001) は学習者自身の視点から言語学習動機を研究する方法として、インタビュー調査を採用した研究を行った。その上で、motivational thinking として学習者が自分の学習動機を高めるためにこれまでの経験や目標などをどのように解釈し動機を語るのかを中心に調査した。大学生を対象とした調査の結果、1、2 年生では動機を得る要因として2つのタイプを指摘している。一方は、言語学習に関連する経験や学習行動そのものをエンジョイすることを中心に語る学習者である。他方は試験に合格することや将来の職業を意識した目標に重点を置いている学習者だ。Ushioda (2001) では、さらに一年後にフォローアップ・インタビューを行い、前者に重点を置く学習者は将来の目標を意識する後者のタイプへと変動していることが証明されている。

本研究では、この Ushioda (2001) の調査結果に基づき、学習者の語りにおける動機の要因を「学習行動に対するエンジョイメント」と「将来の目標」の観点から分析を行う。

3 調査方法

3.1 インタビュー方法

本研究では、調査方法として Flick (2000, 2002) で提唱されている episodic interviewing を用いた。このインタビュー方法は、調査協力者の語りを用いた調査方法であり、個々人の日常生活における特定の物事に関連する経験や独自の意味づけを研究対象とする。episodic interviewing の背景には、人間は物事に関連する特定の経験に結びつけることで意味づけるエピソード的知識 (episodic knowledge) と意味や他との関連性を一般化することで意味づける意味的知識 (semantic knowledge) にて記憶される、といった考えがある (Flick 2002; 158)。episodic interviewing を調査方法として用いる

ことで、ドイツの日本語学習者が外国語学習に対する意味づけをどのように行い、学習動機を得ているかを明らかにする。なお、episodic interviewing は質的調査方法の一種であり、量的調査のようにドイツの日本語学習者の概観を得ることはできない。本研究では、全体像を得ることよりもひとりの学習者の語学学習に関連する体験をより詳しく分析するため、対象者を少なくし質的調査方法を用いた。

なお、同様に学習者の語りを調査方法とした日本語学習動機の研究として、台湾の学習者を自己像の観点から分析した羅（2005）と韓国の学習者を対象とした朴（2007）のケーススタディがある。これらの研究については、本研究の結果との比較にてもう一度触れる。

3. 2 調査概要

本研究ではドイツにある大学の東アジア学部で大学1年生3人を対象にドイツ語でインタビューを実施した。この学部では日本語、韓国語、中国語を専攻言語³⁾として選択することができる。また、ダブルメジャー制をとっているため、学生はこれらの専攻のほか、他学部も含めた中からもうひとつ専攻分野を選択しなければならない。

本調査を行うにあたり、韓国学初級クラス⁴⁾で学習者として参与観察を行い、クラス参加者の中から調査協力者を募った。インタビューは2学期目の期末試験が終了した2006年7月から8月にかけて実施した。調査協力者の背景は表1の通りである。

表1 調査協力者の背景

	Patrick (男性)	Nicole (女性)	Felix (男性)
背景	ドイツ人	ドイツ人	ドイツ人 / 韓国人
専攻言語	日本語、韓国語	中国語、韓国語	韓国語、中国語
これまで学んできた言語（時系列順）	英語、ラテン語、日本語、韓国語	ロシア語、英語、イタリア語、ラテン語、日本語、中国語、韓国語	韓国語、英語、ラテン語、中国語

また、インタビューを行うにあたり本研究で着目する要因である「学習行動に対するエンジョイメント」と「将来の目標」から導き出した次の4つの質問をひとつの手がかりとした。これらの質問は、事前に調査協力者にインタビュー方法のコンセプトとともに伝え、あらかじめ語る内容を考えておいてもらった上で実施した。なお本調査では、

³⁾ 日本語と中国語には、言語系と歴史系の専攻が可能だが、1年生のカリキュラムでは統一し、学生の間でも専攻の違いは意識されていなかったため、本研究では「専攻言語」とした。

⁴⁾ 本研究では筆者が学習者として参与観察を行い、ともに新しい言語を学ぶことで信頼関係を築くために韓国語のクラスを選択した。

より日本語学習に対する動機を際立たせることを目的に、日本語学習経験がなく、韓国語学習経験を持つ学生を1人取り入れた。

Q1 外国語教育に関して、学校教育を含め大学に入るまでどのような経験をしてきたか。

その中でどのように東アジア言語を専攻言語にするに至ったか。

Q2 なぜ他のヨーロッパ言語ではなく、東アジア言語に関心を持ったのか。

Q3 大学で専攻言語の勉強を始めてから、どのようにこれらの言語を学習することに対する見方が変動したか。

Q4 今専攻している言語を使って、将来どのような事をしたと考えているか。

4 調査結果の分析

4. 1 ストーリーの分析 (Patrick の例)

本研究では、インタビューの内容を録音し書き起こしたものを、発話や内容によって細分化しコード化を行い、「場所」、「時期」、「言語」のカテゴリーに分類し分析を行った。そして、インタビュー内容を忠実に再構築したものをストーリーとして、関連する社会的背景を説明した上で分析結果を提示する。本稿では、より詳しくひとりの学習者を取り上げるため、もっとも日本語学習歴の長い Patrick の大学での専攻を始めるまでのストーリーを中心に紹介する。分析においてカテゴリーへの分類を行った結果、調査協力者が語った内容は学校教育での外国語学習と日本語学習動機に関連する体験に大きく分類できた。そのため、本稿ではこれらの項目に従い、ストーリーの提示を行う。なお、ストーリーの中の下線部は分析に関連する箇所を示している。

4. 1. 1 社会的背景

【学校における外国語学習】

ドイツの学校制度では、第5学年以降の中等教育段階からギムナジウム、実科学校、基幹学校といった学校種に分岐している。ギムナジウムは大学入学資格であるアビトゥアを受験することを視野に入れた学校、実科学校、基幹学校では将来の職業のための知識や技術を学ぶための学校である。また、最近では第4学年が終った段階で将来の方向を決断しなければならない点に対する批判から、総合学校という3つの学校種全ての機能をもつ学校も増えている。

全ての学校種では共通して第5学年から第一外国語が必須であり、ほとんどの場合が英語である。ギムナジウムでは、第7学年から第二外国語が必須科目となり、学校側が提供している言語の中から生徒が選択する。第二外国語としては、ラテン語、フランス

語などがもっとも多く提供されている。第一外国語が英語でない場合、ここで英語を選択しなければならない。なお、日本語はまだ正規科目として認められていない場合が多く、中等教育段階で学ぶためには独学もしくは評価対象外の課外活動や語学学校に通うことになる。

【日本のポップカルチャーの流行】

ドイツでは他のヨーロッパ諸国と同様に日本のポップカルチャーが流行し、日本語学習動機に大きな影響を与えている。また、Berndt (1995) は『ちびまる子ちゃん』など、内容を理解するために日本の社会的背景の知識が必要なものもドイツで好まれている点を指摘している。つまり、これらは若者にとって簡単もしくは無意識に日本語や日本の文化、社会事情にふれられるメディアともいえる。また、2006年に日本貿易機構が行ったドイツにおける日本のマンガ市場調査によると、ドイツではフランスと比較して少女マンガの人気が高いため、ドイツ語に翻訳されているマンガのジャンルも偏っていることが明らかになっている。そのためか、ドイツよりも各ジャンルで均等的に翻訳されているフランスでは日本のマンガは社会的地位を確立しつつあるが、ドイツでは販売することを躊躇している書店もみられる (日本貿易機構 2006; 13-14)。日本のポップカルチャーに夢中になる人々に対し、ある意味マニアックと解釈される傾向があるのもドイツの特徴といえる。

4. 1. 2 ストーリー

【学校教育における外国語学習】

Patrick は、6歳ごろから家にあったパソコンゲームを通じ、英語に触れていた。そのため、学校で英語の授業が導入されても、彼にとって比較的簡単に感じられた。また、英語が導入された第5学年の頃から漠然と「色々な言語を学び、世界中の人と分かり合えるようになりたい」(P/89-97) と考えるようになる。ここから、外国語学習そのものにも興味を持ち出す。

中等教育段階でギムナジウムを選択した Patrick は、第二外国語としてフランス語とラテン語の選択肢の中からラテン語を選択する。その理由は、「フランス語はドイツに近すぎるから興味を持てなかった」(P/121-127) と説明した。ラテン語の授業は彼にとって文法や単語を最初から勉強したため、英語よりも難しく感じられたが面白くもあった。それは、「英語は早くから将来絶対に必要になってくる」(P/61-65) ことを意識していたからだ。また、ドイツ人にとって古典語にあたるラテン語を勉強することで、「ドイツの文化的背景や常識的な知識が成り立った背景を発見したことがもっとも楽しかった

た」(P/51-57)と語っている。これをきっかけに、言語学習において常に背景にある文化や歴史に興味を抱くようになる。

【日本のポップカルチャーの流行から日本語学習動機へ】

趣味としてゲームを続けていた Patrick は次第にテレビゲームにも興味を持つようになり、作成された文化的背景にも関心を抱くようになる。そこで出会ったのが彼にとって全く未知な日本文化であり、彼は馴染みのあるヨーロッパ文化とは全く異なる文化が存在することに驚く。異文化に惹かれていた Patrick は、この経験をきっかけに日本人やその文化についてドイツのメディアを通してではなく、自分の手で知りたいと思うようになる。そして、日本語を日本について知るための橋渡しと捉え、友人と語学学校の日本語コースに通う。その授業でひらがなとカタカナを一通り勉強し、「読めるようになることで文字の繊細さに感激した。また、英語などと比べると日本語が分かる人は少ない。」(P/290-294)「このような文字を勉強することで、文字を理解できるようになっていく学習成果を実感できることが嬉しかった」(P/306-318)としている。この経験から、Patrick は大学でも日本語を専攻言語とする。

大学では彼は二つ目の専攻として韓国学を選択している。その理由は、「友人が日本語と中国語を選択したから、同じものを専攻したくなかった」(P/150-152)と説明している。また、日本語学習全般を振り返り、「漢字を勉強することがもっとも楽しい」(P/230)とし、「日本語のマンガやゲームを見て、学習成果を実感できるから」(P/238-248)と理由づけている。

学校教育での外国語学習と日本語学習動機に関連する Patrick のストーリーから、学校でラテン語を学習した際に発見した文化的背景への興味から、ゲーム背景にも関心を持ち日本語学習へと導かれていることがわかる。つまり、彼の中ではラテン語学習体験と日本語学習は関連づけられていたといえる。ここから、一見関連性のないように見られる言語学習体験においても、学習動機の要因に関しては学習者の中で関連づけられていることがわかる。同様の傾向は、Nicole でも見られた。彼女の傾向については次節で触れる。

また、Patrick のストーリーでは学習動機はエキゾチックな言語として日本語に興味をもつことが中心に語られ、目標言語を使用する具体的な目標には重点が置かれていない。ドイツの大学で日本語学習動機について1年生50人を対象にアンケート調査を行った真嶋(2002)、真嶋ほか(2004)では、日本語学習の魅力として「エキゾチック」さ(27

人)と「漢字」(20人)を挙げている学習者が最も多かった⁵⁾。この結果は、Patrickの様な例はドイツでは少なくないことを裏付けている。本研究では、エキゾチックな言語への興味と学習動機についてさらに分析を行った。

4.2 エキゾチックな言語としての日本語

エキゾチックな言語のひとつとして日本語を選択したのなら、なぜ韓国語、中国語に至らなかったのだろうか。この疑問点については真嶋ほか(2004)でもアンケート結果から投げかけられている。本研究では、これら全ての言語を視野に入れたため、言語選択の理由がインタビューで語られた。ここでは、Nicoleの例を取り上げる。

小学校でのロシア語学習体験からアルファベット以外の文字に興味を抱くようになった彼女は日本語、韓国語、中国語学習を始めようとした時の経験について、次のように語った⁶⁾。

【N125-142】(NはNicole、Iは調査者の発言)

125/126 N: (韓国語は)、そう、韓国のホラー映画を見て、そこでハングル文字を見て、すごい、円と角がいっぱいある、これは絶対に(勉強しなきゃ)…。それで、でもベルリンには無かった、あの、韓国語の初級コースがなかった。

127 I: うん。

128 N: 市営の語学学校にはなかった。それで、それじゃ(そこで開講されていた)中国語を勉強しようって思った。

129 I: あー。そうだよ。ドイツ人にとってはちょっと似てるよね。ハンジャ文字とその、

130 N: いや、その違いは…、あの、最初本当は日本語を勉強しようと思ったんだけど、でも日本語は難しすぎと思った。

(省略)

142 N: で、そう考えていると大変そうだなーって。で、それで韓国語の方が簡単そうって思った。

また、Patrickはストーリーにもあったように、二つ目の専攻科目として友人と同じ言語を取って避けて韓国語を選択した。この傾向から、エキゾチックな言語のひとつとして日本語、韓国語、中国語に惹かれてはいるが、これらの言語の違いはあまり意識されていないことが分かる。つまり、NicoleとPatrickに関しては、どの言語を学ぶかではなく「エキゾチックな言語」を学ぶことに重点が置かれていた。

⁵⁾ 複数回答可の質問。

⁶⁾ ドイツ語でインタビューを行ったものを筆者が日本語に訳した上で提示する。括弧内は、発言者の意図を理解するため筆者が補ったもの。

4. 3 将来の目標に対する意識

真嶋 (2002) では日本語学習を始めた動機について尋ねた結果、複数回答項目で「将来の職業に生かしたい」とともに「日本語への興味」と答えた学生が40人以上と最も多かった。この結果は、調査対象となった日本語学習者は単にエキゾチックな言語としてだけでなく、将来の職業も意識している事を示唆している。しかし、ここからどちらの要因がどの程度重視されていたかを見出すことはできない。この疑問点について、本調査の将来の目標について尋ねた Q4 にて、一度社会人を経験している Felix が明確に説明している。彼は将来韓国や中国で働きたいことを意識している点を指摘しながら次のように語った。

【F1/106-116】(Felix に対する一回目のインタビュー (F1)、F は Felix の発言)

110 F: うん、僕は別に (社会人経験の中で) 韓国語をやろうと思ったんじゃない。僕は別に10年後には韓国語ができる人が社会で必要になるだろうと考えて韓国語を始めたんじゃない。そう考えていると、上手くいかないんだ。

110 I: うん。

112 F: 例えばずっと前に、5、6年後には教師がたくさんいるようになるだろう、だから教師になろうと考えた人がたくさんいた。だけど、その人たちはまだ職を見つけていない。そう考えたらダメなんだ。これは上手くいかない。

113 I: うん。

114 F: えっと、自分はいつも「よし、これは楽しい (Spaß) ⁷⁾ぞ」と思ったことをやってきたんだ。そして、いつもちゃんと成果があった。

115 I: うん。

116 F: だから、こう考える方がいいんだ。

この部分から、Felix は将来の職業を意識はしているが、それ以上に学習そのものが楽しいこと、つまり「学習行動に対するエンジョイメント」を重視していることが分かる。特に、企業で働いていた Felix は自分にとって楽しいことを続けることが、将来の目標にもつながることが意識されていたといえる。Patrick と Nicole は Felix のように明瞭な言及はしなかったが、同様に将来の職業よりも学習する事が楽しめるかが重視されていた。また、Felix が中国語を選択した理由についても、他の地域には興味がなく「中国語は勉強するのが楽しいからやるんだ」(F1/66) と強調している。これは、Felix が偶然中国に興味を抱いた結果であり、同様のことが中国語以外でも起こり得たと考えられる⁸⁾。この様に、本研究での調査では3人の調査協力者に関して共通して主に Q2 で

⁷⁾ ドイツ語の "Spaß machen" という表現には、「楽しむ」という意味があるが、中でも「生きがいを感じる」といった意味もある。

⁸⁾ インタビューで中国に興味を持った理由を尋ねたが、他の地域に興味をもたなかったことが強調されるのみで、具体的な理由は語られなかった。

語られた「学習行動に対するエンジョイメント」がQ4の「将来の目標」より重視されていた。

この結果を同じ語りを調査対象とした台湾と韓国の例を扱った羅(2005)と朴(2007)と比較すると興味深い点が明らかになってくる。これらのケーススタディで扱った例では、ドイツと同様に日本のポップカルチャーの流行が日本語学習の動機に関連している。しかし、その学習動機への影響はそれぞれ異なっている。羅(2005)で取り上げられている学習者は、日本のポップカルチャーに興味を抱くが、日本語学習が自分の将来の就職に有利になることを意識した上で日本語学習に駆り立てられている。つまり、将来の自己を社会の中に的確に意味づけ、社会における自分の役割を認識することで動機が高くなっている。また韓国の事例では、日本のアニメなどを日本語学習のきっかけとしているが、日本語を上達が簡単そうな言語として捉えている。朴(2007)はこの背景に、外国語学習の必要性が強調される社会の中で、英語に対する苦手感から外国語をひとつでも上達したい欲求との関連性を示唆している。つまり、台湾や韓国の例では学習そのものが楽しいという「学習行動に対するエンジョイメント」ではなく、職業などの「将来の目標」が重視されていることが分かる。これは、Ushioda(2001)の2つの要因のどちらを学習者が重視するかは、とりまく文化的背景によっても異なりうることを示している。また、同じ日本のポップカルチャーをきっかけとしても、それぞれ日本語学習へ駆り立てる要因には個人や地域によって違いが見られる。この違いは、調査協力者の語りを研究対象とすることで、改めて浮彫りになったといえる。学習動機の要因における文化的差異についてはLittlewood(1999)も指摘しており、今後の分析の視点に取り入れていく。

5 まとめ

本調査から、今回取り上げたドイツの日本語と韓国語を学習している大学1年生3人に関しては、経験することから動機を得る「学習行動に対するエンジョイメント」が「将来の職業」よりも強く意識される傾向があることがわかった。また、今回の事例では動機の要因では、日本語、韓国語、中国語に大きな差異は見られず、エキゾチックな言語として認識されていることが明らかになった。この結果は、今後ドイツにおける日本語学習者の動機を分析するにあたり、「学習行動に対するエンジョイメント」はひとつの重要な観点となりうる事を示唆している。また、「学習行動に対するエンジョイメント」にも関連するエキゾチックな言語への興味の背景には、言語の文化的背景への興味などといった点で、一見関連のなさそうな言語学習体験と関連づけられていることもわかった。

これらの特徴は、少人数の調査協力者を対象とし、調査協力者が自ら経験を語る episodic interviewing を用いたことで明らかになった。今回の調査協力者は3人のみであり、また質的調査方法の性質から、本研究で明らかになった特徴をドイツの学習者全体に当てはめることは難しい。しかし、この特徴を事例におけるひとつの共通点として分析の観点に取り入れることは可能ではないか。

また、本研究では調査協力者が1年生のみであったため、Ushioda (2001) で調査が行われたように大学入学以降の長期的な変動を見ることはできなかった。そのため、今後は日本に留学しているドイツの学生⁹⁾を対象とし、さらにインタビュー調査を行う。その上で、「学習行動に対するエンジョイメント」をひとつの観点とし、日本語学習動機の要因の長期的な変動を分析することで、ドイツの日本語教育に貢献していきたい。

参考文献一覧

- 倉八順子 (1992) 「日本語学習者の動機に関する調査—動機の文化的背景の関連—」『日本語教育』77, 129-141.
- ゲーネンツ、カイ (2001) 「日本語ブームから20年—ドイツにおける日本語教育の現状と問題点—」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』6, 73-88.
- 日本貿易機構 (2006) 「ドイツにおけるマンガ市場の実態」<http://www.jetro.go.jp/world/europe/reports/05001277>
- 朴世稀 (2007) 「日本語学習者の社会文化的要因と動機付けについて—韓国人学習者とのインタビュー内容を中心に—」『間谷論集』1, 49-79.
- 真嶋潤子 (2002) 「ドイツの大学生における日本語学習の動機—初級学習者の意見調査—」大阪外国語大学『平成13年度教育研究学内特別経費プロジェクト「異文化共存時代の外国語教育・学習(3)研究成果報告書」』63-67.
- 真嶋潤子、小山洋子、飯島昭治、藤田香織 (2004) 「ドイツの大学における日本語学習者—3大学での調査より—」『Ex Oriente』10, 289-312.
- 松尾馨 (2005) 「2. 3 ドイツ Germany」ヨーロッパ日本語教師会(編)『ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of References for Languages』国際交流基金 107-130.
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向—第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として—」『言語文化と日本語教育 2002年5月特集号』315-329.
- 羅曉勤 (2005) 「ライフストーリー・インタビューによる外国語学習動機に関する一考

⁹⁾ ここでいうドイツの学生とは、ドイツで学校を卒業し大学に在籍している者を指す。

- 察—台湾における日本語学習者を対象に一」『外国語教育研究』8, 38-53.
- Berndt, J. (1995) *Phänomen Manga. Comic-Kultur in Japan*. Berlin: Japan-Edition.
- Crookes, G., & Schmidt, R. W. (1991) "Motivation: Reopening the Research Agenda", *Language Learning*, 41 (4), 469-512.
- Dörnyei, Z. (2001) *Teaching and Researching Motivation*. London: Pearson Longman.
- Dörnyei, Z. (2006) "Individual Differences in Second Language Acquisition", *AILLA Review*, 19, 42-68.
- Flick, U. (2000) "Chapter 5 Episodic Interviewing" In M. W. Bauer, & G. Gaskell (ed.), *Qualitative Researching with Text, Image and Sound. A Practical Handbook*. London: Sage, 74-93.
- Flick, U. (2002) *Qualitative Sozialforschung. Eine Einführung*. Hamburg: Rohwohlt.
- Littlewood, W. (1999) "Defining and Developing Autonomy in East Asian Context", *Applied Linguistics*, 20 (1), 71-94.
- Schunk, D. H., Pintrich, P. R., & Meece, J. L. (2008) *Motivation in Education. Theory, Research, and Applications*. Third Edition. Upper Saddle River: Pearson Education.
- Ushioda, E. (2001) "Language Learning at University: Exploring the Role of Motivational Thinking." In: Z. Dörnyei, & R. W. Schmidt (eds.), *Motivation and Second Language Acquisition. Technical Report #23*. Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawai'i, 93-125.
- Web サイト : 国際交流基金 <http://www.jpff.go.jp>